

○虚室：…人がいない部屋。『大漢和辞典』では【虚室生白】の項でつぎのような説明をする。

【虚室生白】室中を開放すれば自から光線が入り来つてあかるくなる。轉じて、人心も無念無想であれば、自から眞理に到達することが出来る喩。

『莊子』「人間世」に「虚室生白。吉祥止止。〔注〕夫吉祥之所集者、至虚至静也」の用例が、また『釈文』に「崔云、白者日光所照也、司馬云、室比喻心、心能空虚、則純白獨生也」の用例が、また『淮南子』「傲真訓」に「由此觀之、用也必假之於弗用也、是故虚室生白、吉祥止也。〔注〕虚心也。室身也。白道也。能虚其心以生于道、道性無欲、吉祥来止舍也。」の用例が見られる。

○虚白：…『漢語大詞典』には「①語本《莊子・人間世》虚室生白、吉祥止止。謂心中純淨無欲」と説明し、『北史』「隱逸傳・徐則」の「先生履德養空、宗玄齊物、深暎義理、頗味法門。悦性冲玄、恬神虚白、澹松餌求、栖息煙霞」の用例を引く。

▼ここでの「虚白」は「虚無淡泊の襟懷（無為自然の境地）」の意。杜甫「《婦》詩」に「虚白高人静、喧卑俗累牽」の句が見える。

96 ○遊談：…交遊して自由に語り合う。『漢語大詞典』では「②交游閑談」と説明する。

ここでは具体的に太宰の地で心おきなく雑談に興じる人物がいたと想定するのは、無理があると考えられる。ここはあくまでも生身の人間社会と我が身の接触を持ち得ない極限の状況で、ひたすらに「書物」の世界で我が身を生かそうとしている句内容だと解釈するのが妥当ではないだろうか。それが次の97句以降の老荘の世界に展開されていく句作りだと考える。

○玄 ……①くろい。②奥深い。